

# SONITA ソニータ

2017年10月21日（土）アップリンク渋谷公開！



## SONITA

監督：ロクサレ・ガエム・マガミ

出演：ソニータ・アリザデ、  
ロクサレ・ガエム・マガミ

製作総指揮：ゲルト・ハーク  
プロデューサー：アリン・シュミット、

カースティン・クリーク、  
ロクサレ・ガエム・マガミ

編集：ルネ・シュヴァイツァー

音楽：ソニータ・アリザデ、  
セパンダマズ・エラヒ・シラジ

制作：TAG/TRAUM

共同製作：INTERMEZZO FILM、

ロクサレ・ガエム・マガミ、  
NDR、RTS、SRG SSR、DR

原題：Sonita

配給：ユナイテッドピープル

2015年 / 91分 / スイス・ドイツ・イラン

後援：

国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所、  
Girl Power、ハリウッド化粧品

<http://www.unitedpeople.jp/sonita/>

《サンダンス映画祭2016 ワールドシネマ部門グランプリ&観客賞》  
《アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭 (IDFA) 2015 観客賞》  
《シェフィールドドキュメンタリー映画祭2016 ヤング審査員賞》他多数

### 海外プレスの反響

イギリスベスト映画ランキング第4位（2016年10月21日付 ガーディアン紙）

「輝かしい。驚かされ続ける。」ガーディアン紙（レスリー・フェルペリン）★★★★★

「彼女の力強い物語に心を奪われずにはられない。」ガーディアン紙（ニゲル・スミス）★★★★★

「愕然！」フィナンシャル・タイムズ紙 ★★★★★

宣伝問い合わせ：岩井秀世 090-7270-0423 [iwail977@gmail.com](mailto:iwail977@gmail.com)

/ PIES SHOWROOM FUKUkeda 080-3240-8020 [fuku@pies.jp](mailto:fuku@pies.jp)

配給問い合わせ：ユナイテッドピープル 090-8833-6669 [sonita@unitedpeople.jp](mailto:sonita@unitedpeople.jp)



## 概要

ソニータの理想の両親はマイケル・ジャクソンとリアーナ。もしパスポートを持っていたら名前はソニータ・ジャクソンにしたいと言う。スクラップブックに書いた夢は有名なラッパーになること。しかし、現在の彼女のファンはイランの首都テヘランの子ども保護施設の子どもたちだけ。パスポートも滞在許可証もなく、アフガニスタンのタリバンから逃れてきた難民の彼女は、不法移民としてこの施設で心の傷を癒やすためのカウンセリングや将来のアドバイスを受けている。一方で彼女の家族は全く別の将来を準備していた。アフガニスタンに住む親は、16歳になったソニータを、古くからの習慣どおりに見ず知らずの男性に嫁がせようとする。花嫁の値段は9,000ドル。夢を追いかけたソニータに結婚する気はない。しかし、家族との関係も失いたくない。そんなジレンマを抱えながらも女性が歌うことが許されないイランで、ソニータはどうしたらラッパーになる夢を叶えることができるのだろうか？ロクサレ・ガエム・マガミ監督は、取材対象の人生に関与すべきかどうか悩みながらも、同じ女性としてこの間に答えるようにソニータの夢と人生に深く関わることとなる。ラップのビデオクリップを製作すると、運命を変える出来事が起きる。果たしてソニータは人生を変えるチャンスをもたせることができるのか？





## 作品背景

2001年9月11日、アメリカ同時多発テロ事件が発生。その年の10月にはアメリカを中心とした多国籍軍がアフガニスタンに侵略しタリバン政権が崩壊した。タリバン政権崩壊後のアフガニスタンでは2002年6月に移行政権が発足し、2005年には議会選挙が行われるなど、新しい国家作りが進んでいた。しかし2003年以後、徐々にアフガニスタン南部を中心に勢力を回復していったタリバンによるテロや攻撃が増加していった。同時に危険が増すアフガニスタンを出国する難民も増加の一途をたどることとなる。10歳の頃、家族と共にイランへと逃れた少女ソニータも、そんな難民の一人だ。国際連合難民高等弁務官事務所によると2016年末の時点でイランに暮らすアフガニスタン難民は約95万人。不法滞在者を加えれば、その数は数百万人にも及ぶともいわれる。

ソニータはテヘラン郊外の貧困地域に滞在許可書なく不法滞在する難民の一人だ。滞在許可証も保証人もいない彼女らにとって、住む場所を確保することすら難しい。誕生時から公的な書類で誕生の記録が存在しないため、正確な誕生日もわからない。また、アフガニスタンから逃れたイランでも、ヒジャーブ（頭に被るベール）を身に付けないと逮捕されたり、女性だけで公の場で歌うことが禁じられているなど、子ども支援団体で教育を受けながら、ラッパーの夢を叶えようとするソニータの環境は厳しい。

ソニータの母は兄の結納金を得るため、16歳になったソニータを無理やり知らない男性と結婚させようとする。母本人もソニータよりもずっと若い頃に同じように結婚している。アフガニスタンでは、親に言われるがままに結婚することが古くからのしきたりとなっているのだ。確かな統計を取ることがアフガニスタンでは難しいが、18歳未満で約半数の女性が結婚すると言われ、アフガニスタン独立人権委員会によると60～80%の女性が親が決めた相手と結婚している。いわゆる強制婚である。ソニータが保護されている施設の子どもたちも次々と結納金と引き換えに結婚が決まっていく中、ソニータはアフガニスタンの少女たちが抱える悩み、悲しみや怒りをラップに込めて歌い始める。そして次第に才能を開花させ、運命を変えていく。

## 映画レビュー

「アカデミー賞関連の中で選り好みをし年間ベスト10の基盤が形成される頃合いだがこの『ソニータ』に出逢いベスト10が覆った」

斎藤工（映画秘宝「映画じかけのオレンチ」第99回より）

親に売られる身の上。  
女が奴隷である現状。ソニータは超リアルなアフガニスタン出身の  
フィメールラッパーであり、今一番売れて欲しい人でもあった。  
売れなければ人生が元通りになってしまう

いとうせいこう（twitterより）

心に鍵をかけるのをやめた  
ソニータ

彼女の中の怪物が暴れだした  
それを、音楽という。  
もう誰にも止められない  
言葉の生まれる瞬間を  
映画を通して立ち会えると  
こっちは興奮してしまう  
あなたも  
詩人誕生の目撃者になりませんか

一青窈（歌手）

ドラマのような、ストーリー展開。何度もフライヤーを確認して、ドキュメンタリーなんだと。  
しきたりとはいえ女として生まれたからには『値段』をつけられるのは悲しみを越えて憤りを感じた。  
ソニータの人生、道が拓かれていくのには理由がある。ソニータだから訴えられる。  
彼女がラップで語りかける言葉には、悲鳴と攻撃性にあふれている。  
だが、そこに共鳴できて、見ている私達が心を締め付けられるのには、この90分間の作品をみていくうちに、  
ソニータに触れて、抱き締めたい。一緒に笑って、泣いて、怒って、喜んで。いつの間にか、わたしもソニータの中へ、側にいていたから。  
この映画を通して、犠牲になることが、親への恩返しではない。自分のために生き抜くことが、  
生まれてきたことへの、恩返しなのだ

サヘル・ローズ（タレント/女優）

親が決めた年の離れた人と結婚するなんて  
私には考えられない。  
親に助けてもらえないなら誰を頼ればいいのか  
だろうか。

まだ遊んでいたい、夢を追いかけたい  
年齢なのに。  
今、親に「あなたを売りたい」と言われ  
たら私は立ち直れない。ソニータは強くて  
美しい。

ゲームや話題のカフェの話で盛り上がる私の  
クラス。同じ地球上で、親に売られること  
で悩んでいる同世代がいるなんてクラスの  
誰が知っているのだろうか。ソニータはもっ  
と知られるべきだ。

井上咲楽（タレント）

タリバンを逃れてテヘランに亡命中の  
アフガン少女が、むりやり望まない結婚を強いられそうな  
自分のことをラップで表現する。これだけでもかなりシュールな  
印象でしょう。ドキュメンタリーとはいえ、冒険スリラー的  
な要素を帯びてくるし、一つの映画として  
見る価値が十分あります。

ピーター・バラカン

今、この瞬間も、同じ地球上で、恐怖と抑圧の中で生きている女  
性たちが大勢いることを実感します。  
でも、自分を信じることで、どんな時も夢と勇気を持ち続けることが  
運命を切り拓いていく、ということ、ソニータの人生は教えて  
くれます。  
若者、そして子供達にも、是非観て欲しい映画です！

川井郁子（ヴァイオリニスト / 作曲家）

この映画に出てくるのはサッカー日本代表が、アジアの最終予選で戦った国々。ということは、世界地図でみれば近しい地域ということ。挨拶の仕方や食事のマナーなど、アメリカやヨーロッパの国々のことには、かなり詳しい日本人の自分たちにとって、何故この映画に出てくる人々の暮らしは、こんなにも変わって見えるのか。その歪みを伝えるためにソニータは唄っているのではないか。

Bose（スチャダラパー）

少女たちが自らの親に  
売り飛ばされてしまったり、  
歌うことすら許されなかったり。  
私たちにとって当たり前のことが  
通用しない社会があることに対する  
ショック。そして、そんな中一人  
の少女が立ち上がり夢のために戦い  
続けるその姿は、涙なしでは  
見られません。

春香クリスティーン（タレント）

国境を越え飛び込んだ異国、  
女性として受けた生、背後まで  
迫る戦禍。立ちただかる  
幾重もの逆境に、少女の抵抗  
はやがてリズムとなる。運命  
をも変えるそのビートは、沈  
黙を裂き、私たちの心まで震  
わせる。

安田菜津紀（フォトジャーナリスト）

## 監督プロフィール

### ロクサレ・ガエム・マガミ

テヘランで生まれテヘラン芸術大学で映画制作とアニメーションを学ぶ。短編映画ではPigeon Fanciers (2000), A Loud Solitude (2010), Born 20 Minutes Late (2010), Going Up the Stairs (2011), and the animated documentary Cyanosis (2007)を制作している。



## ロクサレ・ガエム・マガミ監督インタビュー

### Q.ソニータとはどのように出会ったのでしょうか？

ソニータとは従兄弟がソーシャルワーカーとして働く、子ども支援団体で出会いました。従兄弟がソニータに会い、何かしてあげられないかと頼んできたのです。ソニータは将来歌手になる夢を持つとても才能ある少女でした。ソニータに興味を持った私は、私の友人を紹介し、その友人が私の家でソニータに音楽の基礎やギターを教え始めました。何回かのレッスン後に、私はますます野心的なソニータに興味を持ち、彼女の映画を作ることにしたのです。ラッパーになることを夢見るソニータに、私は明るい将来が想像出来ませんでした。彼女は滞在許可証もありませんので、旅もできません。彼女を取り巻く全てが彼女の夢を妨害するような状況で、彼女には何も出来ないと思いました。そんな彼女がどのように夢を追いかけていくのか興味があったのです。

### Q.その団体は具体的にはどのような団体なのでしょうか？

この団体（Tehran-Society for Protection of Working and Street Children）は、教育を受けられない子どもたちをサポートするための機関です。通っている子どもたちの多くが児童労働をしていて、アフガニスタンからの移民もいます。彼らは公的機関が発行する身分証明書や滞在許可書を持たないため、教育を受けられません。そして貧しいために多くが働かなければなりません。この団体は教育や医療を提供し、そして子どもたちが、少しでも子どもらしい時間が過ごせるように子どもたちをサポートしています。

### Q.ソニータはなぜアフガニスタンからイランに逃れてきたのでしょうか？

彼女のお兄さんがタリバンに撃たれたためです。彼は怪我をしたものの無事でしたが、ソニータの家族がタリバンのターゲットになっていることを知り、イランに逃れたのです。

### Q.撮影に費やした時間はどれくらいでしょうか？その当時、ソニータは何歳だったのでしょうか？

2年半です。ソニータは、誕生時から公的な書類で誕生の記録が存在しません。そのため正確な年齢は分かりませんが、撮影している期間は16歳から18歳だったのではないかと思います。

### Q.このドキュメンタリー映画で、あなた自身が映画に巻き込まれて行きました。何が起きたのでしょうか？

ソニータの母親がソニータをアフガニスタンに連れ戻しにイランにやってきた時、映画監督としては、これでやっと良いストーリーが撮れると喜びました。映画監督としての私はそう喜んだのですが、一方で一人の人間としての私は、ソニータがこの先どうなってしまうのだろうかかと心配で悲しくなりました。ドキュメンタリー監督として感情に流され、彼女を助けるべきではないなど、たくさんの考えが脳裏に浮かびましたが、時間が限られていたため、素早く決断を下さねばならなかったのです。

### Q.一般にドキュメンタリー映画監督は常に客観的であるべきで、取材対象の人生には介入すべきでないと考えていますか？

介入してもしなくても、そのことを隠さず見せなければならぬと思います。嘘をつかず、真実に忠実であることが重要です。誰かを助け、物事を変えることが容易にできるタイミングがある場合、行動に出るべきと私は考えます。ソニータのケースでは、ソニータと共にアフガニスタンに戻り、強制結婚を撮影することも出来ましたが、そうやってソニータを置き去りにすることは出来ませんでした。彼女のように助けられないケースもあります。以前、精神分裂症の薬物中毒者を追っていましたが、彼を助けることは出来ませんでした。

### Q.どのように「ミュージックビデオ」を制作したのか、その経緯を教えてください。

彼女の母親がアフガニスタンに去った後に一緒に作りました。共にストーリーやイメージを考え、完成したミュージックビデオをYouTubeにアップロードしたら口コミが広がったのです。

### Q.ソニータは音楽家なのか、活動家なのか、あなた自身はどう見えていますか？

ソニータは音楽家よりも活動家だと私は思います。彼女自身もそう言っています。強制結婚をなくすための活動に音楽を手段として使っているのです。

### Q.あなたはソニータの人生を完全に変えました。あなた自身も映画制作を通じて人生が変わった点がありますか？

はい。本作で初めて誰かの人生を変える経験をしたのですが、私自身も変わりました。こんなに長期に誰かの人生をサポートすることはなかったので、子を授かった気持ちでした。また、夢の力の凄さを知ることになりました。ソニータの夢は最初、非現実的で不可能と思えました。しかし、彼女には夢を見る権利があるのです。この事は、私の人生に対する態度を変えました。

## ソニータ・アリザデ インタビュー

記事：ハンター大学付属高校 シャーロット・ソーナー（高校3年生）、タンムーズ・フランケル（高校2年生）  
日時：2016年8月27日、スカイプにてインタビュー  
通訳：ベナフシャ・タスミン

### Q. どうしてラップが社会変革の強力な手段になったのでしょうか？

歌詞に注目してもらえるからです。イランで暮らしていた時、恐らく14歳の頃だったと思いますが、私は難民の児童労働者として、そして一人の女の子として、自分の気持ちを伝える手段を探していました。

実は最初はポップミュージックも試しました。でも私の伝えたいメッセージはポップソングでは収まりきらなかったんです。そのあとラップを試してみたら、メッセージを伝える上で一番ぴったりだと気づきました。ラップをしていると心地いいのです。ラップは、私の人生や児童婚が与える影響を伝える手段として有効だと思ったんです。ラップに乗せてメッセージを伝えることで、人々の態度や行動を変えられると、私は信じています。

### Q. 児童婚は世界的なスケールの問題ですが、私たちは児童婚問題に対して何から始められるのでしょうか？

そもそも多くの人々が、児童婚とその悪影響について知らないのだと思います。この習慣は、長い間伝統となっています。そのため、大きな変化を起こすには、地域コミュニティー、教育、そして政策の転換が同時に必要です。

政府は法的に児童婚を廃止し、それが遵守されるように取り組むことが大切です。一方で、地域レベルで本当に変化を起こすためには、各個人、各家族、そしてそれぞれのコミュニティーが、ボトムアップで児童婚撲滅のために取り組む必要があります。

### Q. 児童婚の撲滅に向け、RFK（ロバート・F・ケネディ人権団体）Human Rights Speak Truth To Powerが行っているような人権教育の役割についてはどう思いますか？

人権について学ぶことは大切なことです。児童婚は、教育を受ける権利、平等に扱われる権利、健康、そして、いかなる暴力にも脅かされない自由といった基本的人権を侵害します。多くの人は児童婚を人権侵害と捉えていませんし、少女たちにどんな酷い影響を与えるかを理解していません。

人権教育は、児童婚の問題をより明確にし、なぜ撲滅しなければならないのかを理解する上で役立ちます。また、少女たち自身が自分たちの置かれている状況はおかしく、強制結婚は人権に反しているということに気づくきっかけにもなります。

### Q. 『売られる花嫁』（原題：brides for sale）の歌詞の中に、「沈黙のかわりに私は叫ぶ」という言葉がありますが、あなたにとって、声なき声を届け、抗議することの意義とは何でしょうか？

どんな社会課題を抱える人々なのかにかかわらず、その人々の声が社会に届かなければ、社会が成長し、現状が改善されることはありません。社会の人々がその社会課題について声を上げなければ、その問題が改善する余地はありません。

声を上げて伝えたいことは沢山あるのに、語ることを恐れている友人たちが、私の周りに非常に多くいます。彼女たちは、自分たちの力や、自分たちの経験を伝える方法を知らないだけなんです。「沈黙のかわりに私は叫ぶ」という歌詞は、自分の声を聞いてもらえない、尊重してもらえない人々が個人レベルで何をすべきかというアイデアの表明です。強制婚が迫ったら誰でも叫びたくなるでしょう。誰も伝えたいことがあるはずなのです。一人ひとりの叫びが変化には必要なのです。沈黙しては、変革を起こせる可能性があるはずがありません。

### Q. 数多くのインタビュー記事で、あなたのお母さんも13歳で結婚しており、そうした児童婚の世界しかお母さんも知らないのだと話していますね。お母さんのことをとても愛していらっしゃるように感じました。変革を起こすために、愛はどのような役割があると思いますか？

その通りです。私の母は結婚当日まで夫の顔を見たことがない、幼い花嫁でした。母が幼い私に結婚を迫ったのも、彼女にしてみれば単に昔からの慣習を繰り返しているだけです。家族がなぜ私のことを見知らぬ男に売ろうとしたのか理解できるので、私は母たちを嫌いになることはできません。

## ソニータ・アリザデ インタビュー

**Q.あなたの歌詞のひとつに「私の声は、私の世代の声」とありますが、アフガニスタンや中東諸国の同世代の女性からの支持はありますか？児童婚が常識だった世代との間に、はっきりとした世代間ギャップはありますか？**

10代の女の子たちは大体私と同じように考えていると思います。変化を望んでいる多くの若者たちが、私に連絡をしてきて、何をしたらよいかと尋ねてきます。私が若者に焦点を当てたかったのも、彼女たちには変化を起こしたいという強い決意があるからです。また、児童婚のもたらす悪影響について若者たちから気づかされれば、上の世代も変わるでしょう。

**Q.活動家として活動していてよかったと思える経験や思い出はありますか？また、どんなところから活動のインスピレーションや意欲を得ているのですか？**

私の人生の記憶の大半はあまり良いものではありません。若いうちに結婚し、幸せそうではない友人たちとの記憶です。でも、私の活動を応援するために、多くの方が手伝ってくれたことは、希望を感じますし、幸せな気持ちで胸がいっぱいになります。

イランに住んでいた頃は、児童婚に対して問題意識を持ち、撲滅しようと活動している人が存在することを知らずでした。私は孤立無援ではなく、たくさんの人々が関わりたいと思っていてくれることを知り、心強く想いました。これが一番の喜びです。今は、世界を変えるために活動している全ての人から刺激を受けています。

私たちはどんなことも実現できると信じるべきです。「私の夢の本」と呼んでいるノートがあるのですが、そこには私が人生でやりたいことや、創りたいものの写真を貼っています。中には不可能に思えるものもあります。

まずは想像します。その後に写真でコラージュを作ります。そして、それがまるで現実であるかのように人に話すのです。後は夢の実現のためにとにかく努力するんです。ここが最も重要なポイントです。世界中で沢山の人が変化を起こすために大変な努力をしています。頑張っているのは私だけではないという事実が、私を奮い立たせます。一人ではないと知ったから、進み続けることができるんです。

全ての女の子が、自分の力を発揮して挑戦することができ、自分自身で人生の選択をし、自分らしい生き方ができる世界。そんな世界へをつくりたいというビジョンがあるから取り組み続ける活力が湧いてくるんです。

そんなことが実現した世界のイメージが、私の心の中にはあります。そういったポジティブな変化を社会にもたらそうと決意し、私は私の役割を果たしていくつもりです。全ての女性と少女のために、この世界を変えようと日々願い、活動を続けていきます。



## 映画解説

### 安田菜津紀（フォトジャーナリスト）

戦禍と隣り合わせの故郷、異国での暮らし、そして女性として生を受けたがゆえに、狭められようとする未来への道。たった一人の少女の肩に、いくつもの厳しい現実がのしかかる。ソニータが次々と直面していく逆境に触れながら、取材で出会ってきた少女たちの顔が浮かんだ。いまだ戦闘がおさまらないシリアから、ソニータのように隣国に逃れた少女たちだ。

ソニータが自作のラップの中で、アフガニスタンからの難民として隣国で生きる息苦しさ歌う場面がある。一見文化の似通った隣国であっても、不安定な生活を送っている難民たちを全ての人々が温かく迎え入れるわけではない。



「お前たちが来たから国の状態が悪くなった」「難民たちに仕事をとられている」と差別や偏見に見舞われることもあるのだと、隣国ヨルダンに身を寄せるシリアの人々から度々耳にしてきた。「仕事をすることも許されない。暴言を吐かれることもある。ヨルダンにいると毎日死んだように生きなければならない。だけどシリアに行けば、死ぬのは一回だ」。そんな言葉を残し、再び泥沼の戦闘へと加わっていった青年もいたほどだ。

避難生活を送る人々の中でも、少女たちが置かれる状況はとりわけ厳しい。例えば内戦が激化していった2011年からのわずか3年の間に、隣国ヨルダンで婚姻届けを提出したシリア人の中での児童婚（18歳未満での結婚）の割合が、12%から32%に跳ね上がっている。あるときは困窮する日々の中で、少女を嫁がせ、家族の負担を軽減するために。あるいは不安定な生活の中で、娘に危険が及ばないように。現にヨルダンの難民キャンプでは一時、結婚を装っての人身売買が横行したことがあった。他のアラブ諸国の男性たちが、シリア人の少女たちをターゲットに、作られたばかりでまだ無防備だったキャンプを狙ったのだ。その後もキャンプ内では、性暴力の被害を訴える声が絶えない。「電気が使える時間は夜のたった数時間。真っ暗な道を共同トイレやキッチンまで歩いていくことはとてもできないわ」。女性たちが口々に訴える。

こうした早期の結婚で少女たちがさらされるリスクはあまりに大きい。取材で出会った少女の一人も、15歳で結婚、そして流産を経験していた。若年での妊娠で少女たちが背負うのは、合併症といった身体への負担だけではない。教育の機会を失うことによって、自立が困難となり、貧困の連鎖から抜け出せなくなることもある。「シリアでは当たり前のように、親戚や友人が助けてくれました。今はそのつながりがばらばらになってしまって心細い」。二度目の妊娠で大きなお腹を抱えた少女は、ぼつりぼつりと心の内の不安を語った。彼女はシリアの中でも特に激戦が繰り広げられたアレッポの出身だった。

ソニータの故郷のように、早期結婚や、結婚に伴う金銭のやりとりが元々の文化、風習として残っている場所もある。そこに長引く戦闘や情勢不安などが重なることで、少女たちはより一層困難な状況へと追い込まれていくのだ。

そんな彼女たちの顔が輝く瞬間があった。ヨルダンの難民キャンプ内には、他国からの支援でいくつかの学校が開設されている。ところがそこで実施されているのはヨルダンのカリキュラムだ。主要教科は学べるものの、シリアの子どもたちが元々受けていた、音楽や演劇のような、いわゆる情操教育は含まれていない。爆撃や殺戮による心の傷はすぐに癒えるものではない。先行きの見えない避難生活を送る子どもたちの、行き場をなくしたその感情が、ときに暴力的に、ときには逆に無気力にと、日常に影を落とし始めていた。眠れない、食欲がないなど、体の症状として表れる子どもたちも少なくなかった。そこで日本のNGOなどが働きかけ、既定のカリキュラムに加え、情操教育のクラスを開いていた。



教壇に立っているのも、キャンプの中で暮らすシリア人の先生たちだ。即席の劇を披露したり、心の内を絵で表現したりと、どの教室も子どもたちの眼差しは真剣そのものだ。中でも、廊下にまでにぎやかな声が響き渡るほど盛り上がりを見せていたのが音楽のクラスだ。先生たちが奏でるキーボードや、ウードと呼ばれる伝統の弦楽器に合わせ、少女たちが力いっぱい故郷で覚えた曲を歌いあげていく。

「歌っているときだけ、悲しい気持ちを忘れて故郷を思い出すことが出来るの」。ソニータと年の変わらない少女たちが、小さな子どものようにはしゃぎながら手をたたき、そして声を張り上げる。元タイスラムの文化の中では、地域差はあれ、女性の開放的な服装や振る舞いに抵抗を示す人々も少なくない。彼女たちにとって音楽のクラスは、魂を解き放つ数少ない場の一つだった。

ソニータ自身の生きる姿に加え、もう一つ心に刻まれた場面がある。それはこの物語を紡いでいく、監督自身の葛藤だった。取材者としてどこまで踏み込み、そして関わらせてもらうべきなのか。私自身も取材を進めながら、答えの出せない問いに直面することがある。「これは真実の記録なの。あなたの人生を私に変えることはできない」。助けを求めるソニータに、彼女は当初、そう言い切っていた。兄の結婚資金のために、ソニータがいよいよ故郷に連れ戻され、結婚を強いられるかもしれない。その現実と直面したとき、彼女は心の揺らぎを隠せなくなる。結局、彼女は観察者に徹するのではなく、彼女の人生に深く関わり、運命を変えていく一翼を担うことになる。それがドキュメンタリーを撮る者として、正しいのか、それとも…。そんな迷いそのものが、観る側をも当事者にしていくのだろう。自分だったらどちらを選択するだろうか、ここで何をしていたらだろうか、と。

ソニータを支援し続けた教師が、監督に厳しく投げかける。「あなたなら彼女を救えたかもしれないのに」。助けられる立場にいながらなせ、手を差し伸べないのか。それは監督の肩越しに、私たちに向けられた問いなのかもしれない。世界の至るところに、ソニータのように、理不尽な困難に翻弄される少女たちがいる。そんな少女たちのほとんどが、ソニータのようにチャンスを掴むことなど想像すら難しい中で生きている。なぜ、これだけのことが起きながら行動を起こさないのか。このままだ、傍観しているだけなのか。

紛争から逃れてきた人々の支援、と聞いて多くの人々が思い浮かべるのは食料や水、テントや毛布といった生き延びるために必要な支えだろう。確かにそれは緊急支援として欠かせない時期がある。けれども日が経ち、避難生活が長引くほどに、彼らはそこで日常を営まざるをえなくなっていく。そこに集まる支援は限られている。「水、食料があればなんとかなるのでは?」。それ以上踏み込んだ援助には理解が及びづらいのだ。

確かに水や食料は、体を生かしてはくれるかもしれない。けれどもそれは、生きる意味までをもくれるものだろうか。「社会から必要とされていない」と、仕事も得られずさまようシリアの人々を目の当たりにしてきた。「もう一度学校に行きたかった」と言い残して、病魔に倒れこの世を去った少女がいた。もしもソニータがラップという心の武器を得ていなければ、彼女は今のように自分の足で歩めていたのだろうか。

非常事態にいながらそれぞれが希望を見出すには、平和な時代の何倍ものエネルギーを要するはずだ。日に日に届かなくなる支援の手、一方で忍び寄る無関心という影。少女たちが、それでも明日を迎えたいと思えるように、今、改めてここ日本から心を寄せたい。